

巻頭言

未来を拓く教育心理学

現代社会は、かつてない大きな変化の渦中にあります。グローバル化、情報化、技術革新の波は、子どもたちの社会生活、学習様式、そして心理的な発達のある方にまで深く影響を与えています。このような時代において、不登校の増加、多様な性的指向、貧困や虐待、そしてメンタルヘルスの失調など、学校の内外で包括的支援を必要とするケースはその質・量ともに増加の一途を辿っています。定型的で一律の対応ではとても処しきれない多様性と複雑性が現代教育のキーワードです。

実際、教室に立つと、子どもたちは驚くほど多様だと実感します。同じ学年、同じ教科書、同じ教室のはずなのに、なぜ伸びる子と戸惑う子がいるのか。なぜ親や教員の励ましが救いになる時と心傷になる時があるのか。学ぶ速度、言葉の選び方、沈黙の意味、友人関係の距離、家庭や地域の資源、心身の調子、そしてデジタル環境、それらが複雑に絡み合っている教育は、多層的な相互作用で創り出される複雑系での営みなのです。したがって、どの子にも確かな成長を保障する都合のよいオールマイティな手法はありません。

そして、安易な万能解がないからこそ、人間の複雑さを諦めずに引き受けつつ、理論と実証に基づき多様な手立てを組み合わせ、根拠とともに学びを創造しつつ、その柔軟な支援を可能にするアプローチが不可欠なのです。主観による判断や経験則だけでは公正さを担保できません。われわれは、人間社会という混沌において、一人ひとりの尊厳を守りながら最適な相互作用を引き出す確度の高い支援を求めねばならないのです。その秩序と最適な介入を見出す間こそが教育心理学であり、カオスを内包する発達と学習について、輻輳する関係性を捉えて希望と責任ある具体的手立てを求める営みなのです。

教えて育てることは、相手の人生の可能性に触れる行為であり、その奥深さがわれわれを高ぶらせます。教育心理学を学ぶことは、困難を克服する力や心を支える言葉、協働が生み出す可能性といった教育実践の要となる瞬間が成立

する仕組みを解明することに他なりません。

本書は、新進気鋭である枝廣和憲博士が編者となり、教育心理学における従来の基礎理論に加え、現代的な課題に対応する上での最新知見と臨床的専門職の視点を架橋しています。自己肯定感を育みつつ批判的思考力を養い、生涯に亘って自ら学び続ける人間を育むための英知に満ちているのです。

教育は、いまをいきる人間性の可能性への尽きることのない探究であり、未来の社会を形作る営みでもあります。その中心にいる子どもたちの心を深く理解して支えることこそが、教育心理学を学ぶ本義です。本書が、読者各位の教育活動における「羅針盤」となることで、一人でも多くの子どもたちを確かな力で導く一助となることを心より願っております。

小原 豊
学習院大学教授

いまにいきる教育心理学
-いまをいきる子ども・若者たちに-

目次

巻頭言 i

第1編 教育・学校心理学概論

第1章 教育心理学と学校心理学 2

1. 教育心理学とは 2
2. 学校心理学とは 4
3. 教育心理学と学校心理学の相違点 7
4. なぜ教育心理学を学ぶのか 9
5. まとめと本書の読み方 11

第2章 学習の教育評価 13

1. 教育評価とは何か 13
2. 教育評価の主要な枠組み 14
3. 評価方法の種類と活用 16
4. 評価の質を高める視点 19
5. 評価の活用とフィードバック 21

第3章 学習・言語心理学 25

1. 学習の理論とメカニズム 25
2. 動機づけの理論とメカニズム 27
3. 学習方略の理論とメカニズム 28
4. 学びを生み出す教育 30
5. 言語心理学 32
6. 学習と言語の障害 33

第4章 生徒指導と教育相談 37

1. 現代の児童生徒の課題と現状 37

2. 生徒指導提要の3つの特色	38
3. 生徒指導の意義	39
4. 教育相談の意義	41
5. 生徒指導と教育相談の関係	42
6. これからの「生徒指導」と「教育相談」	44
第5章 進路指導とキャリア教育	47
1. 進路指導とキャリア教育との関係	47
2. ライフキャリアの視点からみたキャリア教育と進路指導	48
3. キャリア・ガイダンスとキャリア・カウンセリング	52
4. まとめと今後の展望	54
第2編 多様な学びを支える	
第1章 ピア・サポートとピア・メディエーション	58
1. 学校現場における課題	58
2. 教育心理学における対立問題に関する実践研究	59
3. ピア・メディエーションとは何か	60
4. ピア・メディエーションの実際	61
第2章 協働的な学びと協同学習	68
1. 協同学習の源流と成立条件、効果	68
2. 協同学習の技法	72
3. 協同学習における留意点	74
第3章 社会性と情動の学習 (Social and Emotional Learning ; SEL)	79
1. 社会性と情動の学習 (Social and Emotional Learning ; SEL) とは	79

2. 日本における SEL 79
3. SEL の実践 82
4. おわりに 87

第3編 教育とアクセシビリティ

第1章 不登校…………… 90

1. 不登校をめぐる歴史と政策 90
2. 今を生きる不登校の子どもたち 92
3. 不登校の支援 96
4. これからの不登校と子どもの学び育ち 98

第2章 要保護児童など

(子どもの貧困、児童虐待、逆境体験など)…………… 101

1. はじめに 101
2. 子どもの貧困と教育へのアクセシビリティ 102
3. 児童虐待と教育へのアクセシビリティ 105
4. 逆境体験と学び支援 108

第3章 性の多様性…………… 111

1. はじめに 111
2. 多様な性の在り方の理解 111
3. 性の多様性に係る法律の制定 113
4. 性の多様性を認め合う教育が目指すゴール 114
5. 子どもの発達段階と性の多様性を認め合う教育 115
6. 声なき声を聴く、性の多様性に配慮した教職員の姿勢 117
7. 倉敷市教育委員会の教職員研修と保護者啓発の取り組み 118
8. おわりに 119

第4章 特別支援教育	121
1. 特別支援教育とは	121
2. さまざまな障害のある子どもへの指導・支援	123
3. 子どもたちへのよりよい指導・支援に向けて	130

第4編 「チーム学校」と多職種連携協働 (Interprofessional Work ; IPW)

第1章 保健室	134
1. 保健室という場所	134
2. 【聴く】ということ	135
3. 危機サインに寄り添う	136
4. 中間的な立場を生かし、つなぐ	138
5. チーム学校と同僚性	139
6. チーム学校の中で保健室を生かす	141

第2章 スクールカウンセラー (School Counselor ; SC) …	143
1. 日本の学校教育における子どもの現状とチーム学校 (多職種連携協働)の現状	143
2. 海外のスクールカウンセラー	144
3. 日本のスクールカウンセラー	148
4. チーム学校を目指したスクールカウンセリングの実践 (事例)	150
5. 展望と教育心理学的示唆	151

第3章 スクールソーシャルワーカー (School Social Worker ; SSW)	154
1. スクールソーシャルワーカー設置の経緯について	154
2. スクールソーシャルワーカーのしごとの実際	157

3. 高等学校でスクールソーシャルワーカーが扱う事例 157
4. まとめ 162

第5編 メンタルヘルスと心理療法

- 第1章 青年期のメンタルヘルス 166
1. 青年期とは 166
 2. 青年期のメンタルヘルス 167
 3. まとめ 173
- 第2章 教育現場で用いる心理療法 176
1. はじめに 176
 2. 関わりの方向性：アウトサイド・インとインサイド・アウト 177
 3. 引き出すモードの出発点としての「聴く」 178
 4. リソースへの焦点づけ 180
 5. おわりに 184

第6編 いまにいきる教育心理学

- 第1章 ポジティブ行動支援
(Positive Behavior Support ; PBS) 188
1. ポジティブ行動支援 (PBS) の誕生と背景 188
 2. 行動を分析するための ABC フレーム 189
 3. 学校規模ポジティブ行動支援 (SWPBS) の導入 190
 4. ポジティブ行動支援の課題と展望 197

第2章 地域支援とコミュニティ・アプローチ：居場所とナナメの 関係に着目して	199
1. はじめに	199
2. コミュニティ・アプローチの理論的背景	200
3. 地域社会における居場所	201
4. こども・青年の発達とナナメの関係	203
5. 地域社会における居場所とナナメの関係	205
6. 教育心理学的地域支援の方向性	206
第3章 ICT教育・エデュテイメントと学習意欲	209
1. はじめに -ICT と学びの関係を考える	209
2. ICT教育の広がり と日本の教育改革	210
3. エデュテイメントの概念と教育的意義	211
4. ICT教育と学習意欲 - 「わかる」「できる」「つながる」	212
5. 自己調整学習（SRL）の仕組みと ICT	214
6. 教師の役割と ICT 活用力	215
7. ICT教育の課題と今後の方向性	216
8. 展望 - 人間中心の ICT 教育へ	218
9. まとめ	219
第4章 バーチャルキャラクターと現代教育	221
1. はじめに	221
2. VTuber とはなにか	221
3. VTuber をはじめた経緯について	222
4. 現代を生きる若者のコミュニケーションツールと VTuber との関係	223
5. 教育機関において、VTuber が教育活動の一環として授業を担当する試 み	224
6. おわりに	229

x

おわりに 231

第 1 編

教育・学校心理学概論

第1章 教育心理学と学校心理学

1. 教育心理学とは

教育心理学は、教育という営みに関わる現象を、心理学的な方法を用いて実証的に解明し、その成果を教育の改善や学習者理解に応用することを目的とした学問である。心理学が人間の行動について普遍的な法則を明らかにする学問であるのに対し、教育心理学は教育という特定の文脈に焦点化した応用領域であり、教育場面に固有の問題を扱う点に独自性がある（子安，2015）。さらに、教育は学校に限られず、家庭教育、地域教育、生涯教育など多様な場面で展開されることから、教育心理学は「人が学び成長するプロセスの科学的理解」を広く目指す学問ともいえる。

教育心理学には、理論的側面と実践的側面が共存する。理論的側面は、発達、学習、動機づけ、社会的相互作用など、人の行動の背後にある心理的メカニズムを科学的に明らかにすることである。一方で実践的側面は、これらの知見を授業改善、生徒指導、教育相談、評価など具体的な教育活動に応用することである。このように理論と実践が循環し、相互に補完し合うことが教育心理学の大きな特徴である。

（1）教育心理学が扱う領域

教育心理学が扱う領域は広範である。伝統的には、発達、学習、動機づけ、適応、教育評価などが中心的領域として位置づけられてきた。発達領域では、人の心身がどのように変化し、どのような課題に直面するかを明らかにする。学習領域では、理解や記憶の成立、学習方略、教授法の改善などが扱われる。動機づけ領域では、学習意欲を支える心理的要因が検討される。これらの領域

は相互に関連し合い、例えば発達段階の理解は授業設計に、動機づけの理解は学習意欲の支援に密接に結びつく。

近年の教育心理学は、学級集団の力動、教師の専門性、ICTの教育的活用、多文化教育、特別支援教育など多様なテーマを扱うようになっており、教育課題の複雑化に応じてその範囲を拡大している。現代社会において学校が担う役割は拡大しているため、教育心理学は多角的視点から教育現象を理解する枠組みとして重要性を増している。

(2) 科学的アプローチの重要性

教育は人びとの経験や価値観に基づきやすい領域であるが、経験だけに依拠すると誤解や偏りが生じやすい。教育心理学は、実験法、観察法、調査法など科学的手法を用いて客観的なデータに基づく理解を提供する。学習の情報処理過程、メタ認知の働き、動機づけの維持機構、自律性の重要性などの研究成果は、授業づくりや学習支援の改善に大きな影響を与えてきた。

科学的知見は、教師の経験を否定するものではなく、むしろ経験を客観的に見直し、より良い実践につなげるための基盤となる。教育心理学が提供する枠組みは、教育実践者の「なぜこの指導が必要なのか」という根拠を支え、教育活動の透明性と妥当性を高める役割を果たす。

(3) 教育心理学における価値判断

教育心理学は、教育目標の妥当性や教育方法の選択といった価値判断を避けて通れない領域である。一般心理学が事実の記述を中心とするのに対し、教育心理学は「何を学ぶべきか」「どのような学びが望ましいか」という価値に基づく判断を扱う。これは教育という営みの性質上不可避な特徴であるが、教育心理学はその判断を科学的根拠によって支える点で重要である。

(4) 現代教育との関わり

現代教育は、学習者の多様化、家庭環境の変化、ICTの導入、特別支援を必要とする児童生徒の増加など、多くの複雑な課題に直面している。不登校、

いじめ、学力格差などの問題も深刻さを増しており、教育心理学の役割はますます大きくなっている。教育心理学は、これらの課題を理解し、教育実践の改善に役立つ科学的視点を提供することで、教育の質向上に貢献する。

2. 学校心理学とは

学校心理学は、学校という制度的環境において、子どもの学習、心理・社会的適応、進路、健康に関する課題を理解し、心理学的知見と技法を用いて支援する学問領域である。教育心理学が教育現象の背後にある普遍的原理の理解を目的とするのに対し、学校心理学は現場の課題に対応する応用的・実践的領域としての性格が強い（水野，2022）。学校は、授業や学級活動だけでなく、友人関係、部活動、教師との相互作用など、多様な経験が同時に進行する発達の環境であり、学校心理学はこの複雑な環境の中で子どもを総合的に理解することを目指す。

（1）学校を成長の場として理解する

学校は、子どもにとって学習の場であると同時に、対人関係、自己形成、価値観の獲得など多面的な発達が進む重要な生活環境である。こうした環境で生じる課題は、個人の特性だけでなく、学級の風土、教師の指導方針、家庭環境や地域社会の影響など多層の要因が絡み合って生じる。そのため学校心理学は、心理学に加えて教育学、学校経営論、社会学、医療や福祉の知見を総合し、子どもと環境との相互作用として問題を理解する学際的アプローチを重視してきた。

特に、友人関係の葛藤、学習意欲の低下、学校への不適応などの問題は、個人の心理状態だけでは説明できず、学級内の社会的相互作用や教師の関わり方が強く影響する。このように、学校という多層の環境全体を視野に入れた理解が学校心理学の基本的視座となる。

(2) 心理教育的援助サービスの三段階モデル

学校心理学の中心的枠組みが心理教育的援助サービスの三段階モデルである(藤岡, 2010)。これは、児童生徒への支援を、問題の深刻さやニーズに応じて一次的援助、二次的援助、三次的援助に体系的に整理したものであり、学校全体で連続した支援体制を構築するための基盤となる。

一次的援助は、新入生オリエンテーションや学級経営、ソーシャルスキル教育、ストレスマネジメントなど、すべての子どもを対象とした予防的・開発的支援であり、問題が顕在化する前に学校環境を整える役割をもつ。二次的援助は、登校しぶりや軽度の適応困難などの初期的兆候に対する早期支援であり、担任教師、養護教諭、SC、SSW などの連携が重要となる。三次的援助は、不登校、発達障害、深刻ないじめ、学習障害など高度な専門的支援を必要とする子どもへの個別的支援であり、学校内外の専門職によるチーム援助が不可欠となる。

この三段階モデルは、支援を特定の専門職に任せるのではなく、学校全体で段階的かつ継続的に支援に取り組むことの重要性を示している点に意義がある。

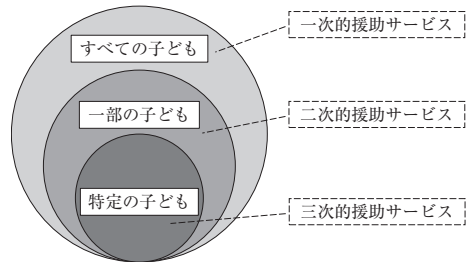


図 1-1 三段階の援助サービスの概念図

(3) 四領域を統合的に扱う視点

学校心理学は、学習面、心理・社会面、進路面、健康面という四つの領域を包括的に扱う。学習面では、学習のつまずきや理解の偏りを分析し、適切な学習支援を行う。心理・社会面では、自己理解、対人関係、ストレス対処などに関わる内面の発達を扱う。進路面では、自己概念の形成や意思決定の支援を通じて、将来の展望を描く力を育成する。健康面では、学校生活における身体的・精神的健康の維持が中心となり、養護教諭との連携が重視される。

これらの領域は相互に影響し合い、例えば学習困難が心理的ストレスを引き起こすこともあれば、対人関係の葛藤が学習意欲を低下させることもある。こ

のような相互作用を踏まえ、学校心理学は個人の問題を単独で捉えず、子どもの学校生活全体を総合的に理解することを重視する。

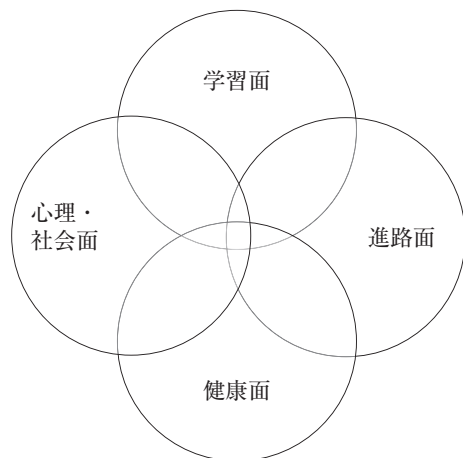


図 1-2 援助の4領域の概念図

(4) チーム援助と学際的協働

学校で生じる課題は、一つの専門職だけでは十分に対応できない場合が多い。担任教師、管理職、養護教諭、スクールカウンセラー (SC)、スクールソーシャルワーカー (SSW)、特別支援コーディネーター、保護者、外部機関などが連携し、それぞれの専門性を活かしながら協働する「チーム援助」が不可欠となる。この協働体制を機能させる上で、学校心理学は共通の概念枠組みと科学的基盤を提供している。

チーム援助が重視される背景には、学校で生じる課題が多層的要因の相互作用で生じることが挙げられる。子どもの心理状態だけでなく、家庭環境、学級の状態、学校組織の方針などが影響し合うため、複数の専門職が協力し、包括的かつ継続的に支援を行う必要がある。学校心理学は、このような学際的アプローチを実現するための枠組みを提供し、現代教育において重要な役割を果たしている。

3. 教育心理学と学校心理学の相違点

教育心理学と学校心理学は、いずれも「教育」を対象とする点で共通している。しかし、両者は目的、対象範囲、方法論、実践への関わり方などにおいて異なる側面をもつ。これらの違いを整理することは、本書で扱う内容を理解する上で不可欠であり、同時に両者が補完的な関係にあることを確認するためにも重要である。

(1) 目的の違い

教育心理学の中心的目的は、学習や発達といった教育現象の背後にある普遍的な原理を科学的に解明することである（子安，2015）。学習者がどのように知識を獲得し、理解を深め、動機づけを維持するのかといったメカニズムを理論的に探究する点が特徴である。一方、学校心理学は、学校現場における子どもの学習・適応・健康に関する課題の改善を直接的に目指す学問であり、実践的援助が主目的となる（水野，2022）。この違いは、教育心理学が「理解のための学問」であり、学校心理学が「援助のための学問」であるという対比でわかりやすく整理できる。

(2) 取り扱う範囲の違い

教育心理学は、学校教育に限らず、家庭教育、社会教育、生涯学習など広範な領域を対象とし、人が生涯を通してどのように学び成長するのかを扱う。一方、学校心理学は学校教育に焦点化され、主に幼稚園から高校までの児童生徒、その保護者、教師を中心とした学校コミュニティを対象とする。教育心理学が広い視野で学習の原理を探究するのに対し、学校心理学は学校という特定の中で生じる現実的課題に焦点を当てる点で特徴づけられる。

(3) 方法論の違い

教育心理学は、認知心理学や発達心理学を中心とした心理学の枠組みから資

料収集や実験・調査を行い、普遍的法則を導く研究方法を採用する。それに対して学校心理学は、心理学だけでなく教育学、学校経営論、社会学、医療、福祉など複数領域の知を統合する学際的アプローチを取る。特に、学校現場での具体的な支援を構築するためには、学習者の心理だけではなく、学級や学校組織の力動、学校外の資源との連携も考慮する必要がある、こうした複雑性に対応するための総合的アプローチが学校心理学の特徴となる。

(4) 実践の位置づけの違い

教育心理学における実践は、理論をどのように教育現場に応用するかという観点から扱われる。一方、学校心理学では実践そのものが学問体系の中心に位置づけられる。特に心理教育的援助サービスの三段階モデル（藤岡，2010）は、学校心理学が実践的援助を中核に据えてきたことを象徴している。学校心理学では、授業改善、生徒指導、カウンセリング、コンサルテーション、チーム援助など、現場での支援技法そのものが学問の主要構成要素となる。

(5) 子ども理解の視点の違い

教育心理学は、知識の獲得、記憶、思考、発達段階など、個人内の心理過程に焦点を当てて理解を進める傾向がある。一方で学校心理学は、個人と環境の相互作用を重視し、学習と適応を「車の両輪」とみなして総合的に理解する。個人の心理状態だけでなく、学級の雰囲気、教師との関係、家庭の状況などがどのように影響するかを分析し、個人と環境の両面から支援を構想するのが学校心理学の特徴である。

(6) 学問間の相補性

教育心理学と学校心理学には明確な違いがあるものの、両者は対立するものではなく相互補完的な関係にある。教育心理学の研究によって明らかになった発達や学習の原理は、学校心理学が現場で展開する心理教育的援助を支える基盤となる。一方で、学校心理学が学校現場で直面する多様な課題は、教育心理学に新たな研究の視点を提供し、理論の発展に貢献する。近年では両領域の知

見を統合し、「教育・学校心理学」として包括的に扱う枠組みの重要性が強調されている。

4. なぜ教育心理学を学ぶのか

教育心理学を学ぶ意義は、教育に関わる専門職だけでなく、幅広い人びとに共有される。教育心理学は、人の学びや成長を科学的に理解するための枠組みを提供し、その知見は授業や生徒指導といった学校教育の領域にとどまらず、社会生活全般に応用可能である。本節では、すべての人にとっての教養、教職志望者にとっての専門的基盤、公認心理師志望者にとっての必須の知識体系という三つの観点から、その必要性和価値を整理する。

(1) すべての人にとっての教養として

教育心理学は、人がどのように学び、理解を深め、意欲を持ち、自らを調整しながら成長していくのかを科学的に説明する学問である。この視点は、学校教育の枠を超え、社会生活のあらゆる場面で役立つ。例えば、新しい技能の習得、職場における他者理解、家庭や地域での子どもとの関わりなど、学習と発達に関する知識は日常的な実践に直結している。

さらに、教育心理学の理論は、自己理解や自己調整のための枠組みとしても機能する。学習方略や動機づけの研究成果は、自分自身が学ぶ際の効率や持続力を高め、長期的な成長を支える基盤となる。また、発達段階の理解は他者の行動や感情の背景を理解する手がかりとなり、家族や職場など多様な場面での対人関係を円滑にする。教育心理学は、広い意味で「人がよりよく生きるための知」を提供する教養として重要性を持つ。

(2) 教職を目指す人にとって

教職を志す人にとって、教育心理学は教育実践を科学的に支える基盤であり、授業づくりや学級経営、生徒理解の根幹をなす。教師は子どもたちの発達段階に応じた指導内容と方法を選択し、個々の特性を踏まえながら教育活動を

展開する必要がある。そのためには、子どもの認知発達、社会性の発達、動機づけのメカニズムなどを理解することが不可欠である。

教育心理学は、教師が直面する具体的な教育課題に応えるための視点も提供する。例えば、授業中の集中困難や学習意欲の低下といった現象を、単なる「努力不足」や「態度の問題」として捉えるのではなく、学習の特性、情報処理の負荷、学級環境の影響など科学的根拠に基づいて理解することができる。こうした理解は、適切な指導や支援を構想する上で重要である。

さらに、教育心理学は、教師自身が実践を振り返り、改善し続けるための省察的視点を提供する。経験だけに依存すると、教師自身の主観的判断に偏る危険があるが、教育心理学の知見はそれらの判断を客観的に見直すための基盤となる。優れた教育実践は、経験と理論が往還することで質が高められるという点で、教育心理学は教職の専門性形成において中心的役割を果たす。

(3) 公認心理師を目指す人にとって

学校は、公認心理師にとって重要な活動領域の一つであるが、教育心理学の知識が求められる場合は学校に限られない。児童福祉施設、医療機関、発達支援センター、地域の家庭支援事業など、子どもの学びや発達に関わる多様な場面で、公認心理師は教育的視点を必要とする。子どもの発達理解、学習理解、家族・地域との関係性の把握といった教育心理学的知識は、子どもの生活環境全体を視野に入れた支援を行う上での基盤となる。

教育心理学の理論は、学校現場における支援の「共通言語」としてだけでなく、子どもや保護者、教員、福祉職、医療職など、多職種が協働する場面全般において有効である。共通の概念枠組みに基づいて課題を理解し、援助方針を調整することは、学校だけでなく地域支援や医療機関においても求められる。教育心理学の知識は、多様な専門家が連携する際のコミュニケーションを円滑にし、協働を支える理論的基盤となる（石隈, 2024）。

また、公認心理師が子どもや家庭に対して行う支援には、多角的なアセスメントが不可欠であり、その背景には学習のつまずき、対人関係の葛藤、家庭環境の変化、学校や地域コミュニティの状況などが複合的に絡み合っている。教

育心理学は、これらの要因を統合的に理解し、個々に応じた適切な支援計画を立案するための視点を提供する。さらに、予防的支援から個別支援までを段階的に構築する心理教育的援助サービスの枠組みは、学校だけでなく、児童福祉や地域支援の場面でも応用可能な概念として重要である。

5. まとめと本書の読み方

本章では、教育心理学と学校心理学という二つの学問領域を取り上げ、その定義、対象、方法、実践との関係、さらに両者の相違点と相補性について整理した。教育心理学は、学習や発達といった教育現象の背後にある普遍的なメカニズムを科学的に明らかにすることを目的とし、学校心理学は学校現場の課題に直接的に取り組むことを目的とする応用領域である。それぞれ目的やアプローチは異なるが、理論と実践が循環する関係にあり、相互に補完し合いながら現代教育の基盤を構成している。

現代の教育現場は、学習者の多様化、家庭や地域社会の変化、ICTの急速な進展、特別支援を必要とする子どもの増加など、複雑かつ多次元的な課題に直面している。こうした状況の中で、教育心理学は学習や発達のメカニズムを理解するための科学的基盤を提供し、学校心理学はその知見を学校全体の支援体制の中でどのように活かすかという実践的視点を与える。両者を合わせて理解することは、教育に関わるすべての人にとって重要であり、教育課題の背後にある要因を多面的に捉え、より効果的な支援や指導につなげるための視座を提供する。

本書では、発達、学習、動機づけ、教育評価、生徒指導、心理的援助、特別支援など、多岐にわたるテーマを取り扱う。これらの章を通じて、読者には理論的知見を単独で理解するだけでなく、学校現場の実践と結びつけながら学んでほしい。教育心理学と学校心理学は、理論と実践の両輪として機能する学問であるため、具体的な教育場面を念頭に置きつつ読み進めることで、学んだ知識がより深く定着し、実際の教育活動や心理的援助に応用しやすくなる。

また、教育心理学は単に教育の専門家だけが学ぶ学問ではない。学びや成長

は、人の一生を通じて続く普遍的プロセスであり、自己理解、他者理解、対人関係の改善、生涯学習の促進など、日常生活に広く関係する。本書の内容を通じて、読者が自らの経験を振り返り、自分自身の学びや関わり方について再考する契機となることを期待している。理論を理解し、それを自分自身の生活や教育実践と関連づけることで、教育心理学の本質的価値をより実感できるだろう。

(前田 裕介)

文献

- 藤岡秀樹「学校心理学から見た教育相談・生徒指導 - 予防的・開発的視点に焦点を当てて -」『教育実践研究紀要』京都教育大学附属教育実践総合センター 10 巻 pp.183-192. 2010
- 石隈利紀「教育・学校心理学の意義」野島一彦・繁榊算男（監修）『教育・学校心理学（第3版）』2024 pp.11-26.
- 子安増男「教育心理学の課題」子安増男・田中俊也・南風原朝和・伊東裕司『教育心理学（第3版）』有斐閣 2015 pp.1-28.
- 水野君平「学校心理学の展望と課題 - 国内の研究動向のレビューを通じた研究手法の概観 -」『教育心理学年報』一般社団法人日本教育心理学会 61 巻 pp.115-132. 2022
- 大芦 治「学校心理学史構築の試み（1）学校心理学は教育心理学とどのように棲み分けていたか：1960年代後半の状況 -」『千葉大学教育学部研究紀要』千葉大学教育学部 71 巻 pp.21-26. 2023